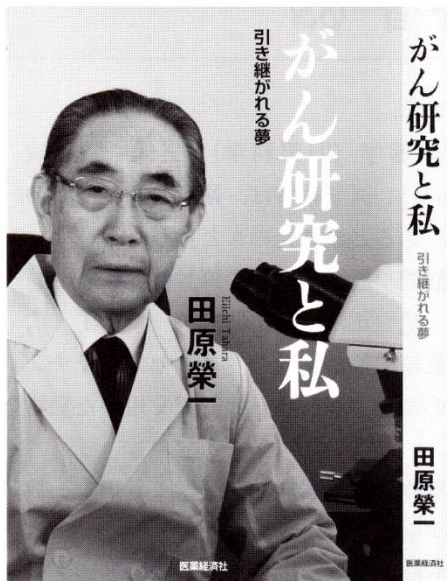


書

評



たはら えいいち
田原 榮一 (昭和38年卒) 著

がん研究と私 引き継がれる夢

「ふるさと庄原で育った幼き日々が原点である」と述べられている如く、先生が5歳の時にお父様が病死され、母と2人の生活が始まる。洋裁を学ばれたお母様は、フレンチ洋裁学校を開設される。

中学生の時には、医師の道に進むために、親子二人三脚の生活が始まる。その甲斐あって、昭和32年4月晴れて、広島大学医学部医進課程に入学。医学の勉強をする傍ら、クラブ活動にも力を入れられ、運動では卓球部で活躍された。文化部としては、丁度、昭和35年の第12回西日本医科学生総合体育大会の主管校が広島大学となり、その大会の前夜祭で、ハワイアンを演奏することが決まり、先生は急遽バンドを結成し、「グリーン・アイランダーズ」が誕生した。この時に着たそろいのアロハシャツは、先生のお母様が縫われた。夢を追いかけた青春時代であった。

インターンを終えて、第二病理学教室に入り、大学院生として病理学を学び、がんと闘

う下地が作られる。

先生の人生を大きく変えたのは、昭和50年・フンボルト財団奨学研究員としての西ドイツ留学である。帰国して半年後、昭和53年6月、第一病理学教授に就任される。このような人事は、広島大学医学部開校以来初めてのことであった。

第二病理学教室で研究してきた肺がんから、第一病理学教室では消化器がんに焦点を絞り、「新しい方法を導入して“癌”の本態を総合的に探求する腫瘍病理学教室」をめざした。この大きな目的に夢を見、病理学の真髄に迫りたいと多くの教室員が増え、全国の大学に教授を輩出し、研究体制は整っていった。

その集大成は、第81回日本病理学会総会宿題報告(平成4年5月):「ヒト胃癌の発生・増殖・進展—分子病理学的アプローチ」である。学会での活躍の勢いはとまらず、第87回日本病理学会総会会長及びISD会長(平成10年)、第58回日本癌学会総会長(平成11年)を務める。

平成12年に広島大学を退官された後も、UCSDがんセンター客員教授、放射線影響研究所常務理事・研究担当理事(この間、日本癌学会会長与又郎賞を受賞)と第二の青春でがんと闘う姿勢は衰えなかった。

平成2年初頭から、国際平和都市、広島市からがんに関する最新情報を発信するため、長年温めていた、広島がんセミナーの財団を設立された。夢を叶えるためには、信念と哲学が必要だと、真摯にがん向き合い、広島がんセミナー理事長として、その土台を造られる。

家庭の心の支えなくして、この偉業はないといってもいい。

(医薬経済社、2014年刊行、¥1,500+税)

にい もと みのる
新 本 稔 (昭和40年卒)

報女会仁広

平成26年7月



第86号

広島大学医学部医学科同窓会誌